

松 山 大 学 論 集
第 24 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 1 2 年 6 月 発 行

教 師 論 攷 Ⅱ

—— 医聖・教育者 真鍋嘉一郎 ——

豊 島 宏

教師論攷Ⅱ

—— 医聖・教育者 真鍋嘉一郎 ——

豊 島 宏

1. はじめに

私が教師の道を志して今年で半世紀を迎えようとしている。教師としては、高校の教師や校長として、大学の教師として、生徒や学生の教育に携わってきたところである。また、愛媛県教育委員会の事務局職員として教育行政にも関わってきたが教育の世界の奥深さを感じている。

一方、教育研究としては、高校の歴史教育を専門分野として、特に、「主題学習」をテーマとして歴史的思考力の育成や高校の日本史、世界史の教科書研究を主体にして研究を重ねている。

さらに、今、研究テーマに取り組んでいることは、教育に携わり顕著な業績を挙げ、強い信念と情熱を傾けた教育の先駆者に視点を当て、“教師とはいかにあるべきか”をテーマとして私なりに研究に取り組んでいるところである。

今回は、大学教師に視点を当てて考えていきたい。この視点に目を向けたのは、私が高校教師を退いて、松山大学に勤務して今年で12年目を迎えているが、その間、“大学教師は如何に在るべきか”の在り方を常に思い巡らしていたことによる。

この問いに対する回答を求めるには、“大学とは何のためにあるのか”の問いを考えていく必要があるのではないかと考える。

大学は、歴史的には欧州で中世において、専門職養成機関としての機能と社会の現実生活との関わりを密接に持つ高等教育機関として発達してきた。そし

て今日でもその精神は受け継がれている。我が国において、今日、グローバル化していく世界の中で、高度な科学立国を掲げ知識基盤社会のリーダーを目指しており、大学は、高等教育機関として社会との関わりにおいて、その知識基盤社会を形成する役割と使命を担っていると言える。言い換えるなら、大学は、知識基盤社会の今日「知のサービス産業」¹⁾として社会に様々な形で貢献していると言える。即ち、「知の生産」とも言える研究活動、「知の伝達」とも言える教育活動、そして、これらを用いた「知の実践（または応用）」、つまり社会的活動である。

このように、大学の役割あるいはその業務内容は、「教育活動」、「研究活動」、「実践活動」の3要素から成り立っていると見え、これらは、社会と極めて密接な関係にある。

従って大学教師として求められる、あるいは備えられるべき資質(能力)は、この3つの要素であると言える。

しかし、我が国の大学教師の多くは、教育よりは研究に重点志向が強いと言われている。世界14カ国で行われたカーネギー教育振興財団の大規模調査の結果²⁾に我が国の大学教師（研究専門職を除く）の70%が教育よりも研究が大切であると自己判断しており、この比率が他国と比べて格段に高い。その理由として、研究の場合は、評価システムとして学会発表、研究誌への論文掲載、出版などを通して学界の評価、被引用回数、受賞、研究助成などによる評価対象の内容が豊富で、昇進や増収につながりやすいということが言える。その点、教育は、教育評価システムが殆ど欠けているということである。その理由として、教育者としての評価をどのような形態、システムで客観的に評価しえるかということ、極めて困難性が伴っている。

求められる大学教師として、この3つの要素が備わっていることが望まれるわけであるが、それが均等にすべて発揮されることは極めて至難の業としか言いようがない。アメリカでは、「研究型教師」、「教育型教師」、「運営型教師」、「学外型教師」³⁾の諸類型に分類されると指摘し、このどの類型に属するかはそ

の型の領域に多くの時間と労力を注いでいるかによるもので他の領域も手掛けている。アメリカではこのように様々なタイプの教師が混在することで大学の活気や英知も生み出されていると言えよう。

このような大学教師像が浮かび上がってくるわけであるが、ここでは、明治から大正、昭和にかけて我が国の大学教育、特に、医学に大きな業績を残し我国の物理療法の草分けとして「医聖」と称された真鍋嘉一郎についての人物像を明らかにすることとしたい。

真鍋嘉一郎という人について知るきっかけとなったのは、松山東高等学校長時代、敷地内にある藩校「明教館」の講堂に掲げられている本校卒業生やゆかりのある人で各界に活躍した名士31名の肖像画がかかっており、真鍋氏はその一人である。私が在任している時、明教館に立ち寄る度にこの肖像画を仰ぎ一人ひとりに思いを馳せていた。真鍋嘉一郎についての肖像画の人物紹介の冊子によると「医学者・教育家、西条市大町の生まれ。明治29年本校卒。第一高等学校・東京帝国大学医科大学卒。明治44年からドイツ留学。帰朝後、母校の教授となる一方、伝染病研究所、物理的療法研究所などで指導的役割を果たす。恩師夏目漱石の最期をみとる。」⁴⁾とあった。

この真鍋氏の肖像画からは、人を引きつけずにはおれない柔和で、笑みをたたえた表情と一方では口元をぎゅっと結んだ表情には何物にも負けない強い信念と強靱な努力家としての表情がうかがえた。そこから、“真鍋嘉一郎とは一体どのような人物なのだろうか”との強い思いが沸き起こってきた。真鍋氏に係る研究を進める事によって、私が現在勤務している松山大学での大学教育の在り方にも示唆を与えてくれるのではないかと思っている。

真鍋嘉一郎の大学教師像を浮き彫りにするために、『伝記・真鍋嘉一郎』（『伝記叢書312』、真鍋先生伝記編集会、小野印刷、1950年。又は大空社、1998年）⁵⁾に記載されている伝記内容を手懸りとして嘉一郎の教師としての人的資質(能力)、教育活動、研究活動、実践活動について研究考察していきたい。

2. 真鍋嘉一郎の人物像

(1) 真鍋嘉一郎の人柄（性格）の特質

真鍋嘉一郎（以下文章中略して嘉一郎と記述することとする）の性格について叙述すると、『伝記・真鍋嘉一郎』の中で、子弟の一人が「熱と努力の人であった。そして、又、誠意の人でもあった」⁶⁾と述懐している。また、青年らしい一本気なところと激しさがあがり、この絶えず鞭打って止まない気性は彼が大成する要因の一つでもあり、そして友情や正義心に篤く、純粹で公明正大な姿勢は、少年・青年時代を問わず終生持ち続けていった特性であり、大人になってからはむしろアンバランスな面すら感じられる。また、負けず嫌いで非常に厳しい気性の持ち主で、短気で癩癪持ちでもあった。

(2) 嘉一郎の生育歴と人柄（性格）の形成

嘉一郎のこのような人柄（性格）はどのような生育歴から生まれたのだろうか。

嘉一郎は、明治11（1878）年新居郡大町村（現西条市大町）で、父寅吉と母ますとの間に長男として生まれた。父寅吉は、養嗣子として真鍋家の跡目を相続したが廃藩置県後士族としての金禄公債は、禄高が少なかったため僅かなもので、帰農には及ばず同村に設けられた積善小学校の教員となった。母ますは、儒学者日野三楽の孫娘で、寅吉は三楽先生の門をたたき学問を学んでいた。そのこともあって、嘉一郎は幼少のころは日野家は自分の家同然に行ったり来たりしていたようである。妹ぎんが生まれた頃、当時西条人士の間で鉾山熱が広まっていったが父寅吉もそれに染まり、家の近くに在ったアンチモニーの鉾山採掘に手を出し、思わしい実績を挙げられず失敗の中で嘉一郎6歳の頃逝去した。2人の幼児を抱えた母ますはたちまちのうちに生計の苦難に直面した。生活を守るため母は濯ぎ洗濯、洗い張りなどの賃仕事をし、女手で出来る事は何でもし、2人の子どもを育てていった。母は表面は柔和で物腰も至極淑やか

であった。芯は強い所があったが決してそれを外へは出さなかった。母の唯一の願いは「早う大きくなって、一生懸命に勉強して、偉い人になっておくれよ、偉い人⁷⁾と口癖のように言っていたのに対し、嘉一郎も「屹度、えらくなるぞ、偉くなって見せるぞ⁸⁾と子ども心に固く誓った。このような嘉一郎の境遇の中で心の中に強い決意（意志力）や怯まない忍耐力が育まれたものと考えらる。

嘉一郎の気性の激しさとひたむきな努力家としての性分を表すものとして少年時代、嘉一郎は見た目にも『蒲柳の質』（からだの弱い人のたとえ）で蒼白い物閑かな質で小学校ではクラスの中で身体は弱く、鉄棒も身を支えるだけの力しかなく体操は好くなかった。しかし、自らは、身体を丈夫にするため、剣道や柔道にも励んで身体作りに目一杯努力をしている。

嘉一郎の負けず嫌いは、勉強の面においては小学校、松山中学校、一高、東京帝大を通して殆ど首席の座を維持していた事でもうかがえる。また、勉強だけでなく、碁や将棋の遊戯にも及び負けると泣いて口惜しがり「いや何でも負けるのは厭じゃ。負けたらわしは泣かんとようおらん⁹⁾というように、非常に厳しい気性の持ち主で、生来気が短く癪癪持ちであった。

嘉一郎の懸命な努力ぶりは、勉強においても遊戯や歌舞伎においても見られる。松山中学時代、彼は常に郷里に残してきた母親や妹のことを思い、自分のために学資を貢いでくれる叔父日野徳太郎の恩を念頭に置き、絶えず自戒自粛して日夜刻苦精励し、同年実施される学期試験で丙組の首席を占めた。また、金子元太郎先生の許で同宿していた矢野義二郎の述懐によると「彼は碁も将棋も嗜まない…松山に行ってから全然手に触れなかった。朝は夙く起き夜は一定の時間に就寝し、その間絶えず机に嚙り着いてばかりいた。何の学科も万遍なく勉強して教師の述べる所は一言半句も漏らさずこれを記帳するに努めた。予習復習は欠かしたことがなく宿題などはたとえ徹夜をしても必ず成し遂げなければ惜かないという風であった¹⁰⁾と述べている。後年彼が大学教授となった後、その弟子に訓うるに「人のこれは一たびする所は、吾これは十たびせ

む。人の十たびする所は吾百たびせむとは一生を通じて僕の守った箴言である。諸子もこれに習へ」¹¹⁾と口癖のように何遍となく言って聞かせたということで、実際彼は一生を通じてこの箴言を服膺していた。この努力するという心根は、この中学時代から彼の身に附いたものである。

彼の努力家としての真骨頂が発揮された時期に一高・東京帝大時代がある。一高に入学した第一学期の試験から首席を占め、一高の3年間と東京帝国大学の4年間を通じて殆ど常に一番で通した。彼のこの実績は、経済的に学業一筋に専念できない状況にあつて、かなりの時間を割いて軍部の翻訳の下請けをして自活しながら勉強するといった日々を送っていたわけで、また、彼の身体は生来『蒲柳の質』で、この艱難に耐えられる状態ではないと思われたことで、同窓の友は彼の健康を心配した。しかし、彼の逆境からの負けじ魂は発揮され、一高の入学の初年度から柔道の寒稽古に皆勤で通し、部長の先生から賞ももらった。外貌からは弱々しさを感じさせるが身体は寒稽古などで鍛えていき筋骨は逞しく、一生を通じて精魂を込めて職務を全うしえる身体づくりがなされていたのである。

(3) 嘉一郎の思い (人間性)

嘉一郎にとって、その生涯に渡って幾多の面で、又、様々な形で、多くの方々によって支えられ、励まされ、勇気づけられて逞しく成長していったと考えられる。そこで、嘉一郎と関わってきた方々の中で特に影響の深かった方々を取り上げ、どのようなつながりがあったのか、嘉一郎のその方々への感謝の気持ちと強い恩義の思いがどのようなであったのか、などについて叙述することとしたい。

○日野徳太郎——嘉一郎が6歳にして父を失い、生計の道を殆ど断たれ、賃仕事による僅かの収入で生活を余儀なくされた状態で、向学の志止み難く上級学校への夢を持っていたが、経済状態で如何ともしがたく、自分の思いを強く言うこともできず高等小学校卒業時、日々悶々としていたが、それを叶えてく

れたのが叔父の日野徳太郎氏であった。「よし、それ程までにお前が言うなら中学を出るまでの学資は何うにでもして俺が続けてやろう。がそれ以上の事は俺の力に及ばぬから、その積りで勉強せい」¹²⁾とってくれた。叔父の言葉を聞いた嘉一郎は天にも昇る心地であった。この叔父の援助によって嘉一郎の将来への道が開けたのである。その恩義の思いは、叔父日野徳太郎が、後年、中風を患い、昭和7(1932)年初夏に、危篤が伝えられるや、嘉一郎は飛んで郷里に帰り、1か月間も西条に滞在し看護に努めた。生父にも等しい恩義を垣間見た。

○金子元太郎——金子先生は西条に近い船屋村の出身で、松山師範学校を出てすぐ新進気鋭の先生として明治22(1889)年西条高等小学校へ赴任された。嘉一郎は、友人数名と明治21(1888)年7月明屋敷尋常小学校を卒業し、西条高等小学校に入学し、金子先生の教えを受けた。先生は、嘉一郎の俊英な振舞を見て、深く心に焼き付けられ、嘉一郎の方も好く先生を慕った。彼が小学校を卒業し松山中学へ入学を思い立ったのは先生からの励ましの言葉によるところ大であった。先生は、明治25(1892)年3月(～28.10)、松山中学に赴任され、先生の後を慕って嘉一郎は松山中学に入学し、その在学中は金子先生の家に寄宿し、そこで先生と一緒に自炊生活を続けた。青雲の志を抱いた嘉一郎は、郷里西条に残した母親や妹のこと、学資を援助してくれている叔父日野徳太郎のことなどを思い、日夜刻苦精励し、松山中学在学中首席を通した。

その後、金子先生は、松山中学校(～28.10)を離れて上京し、成城学校に勤務された。嘉一郎は、一高を受験するため金子先生の元へ落ち着き、一高三部に首席で入学し、新入生として一高の向陵生活を送った。金子先生は、その後、横浜市の神奈川県第一中学校へ奉職されたが、明治33(1900)年大阪府立第六中学校に移られ、明治36(1903)年兵庫県龍野中学校に転任され、明治41(1908)年に郷里西条に県立中学校が設立されるや、ここに奉職され大正10(1921)年まで勤務された。

その後、病気で引退し、郷里西条で静養していたが、おもわしくなく嘉一郎

の治療を受けるべく上京し、物療内科に入院されたが、入院後10日ばかりで逝去された。

嘉一郎は、恩師金子先生を父親のように心から慕い、生活を共にした間柄であっただけに深い悲しみにさらされた。嘉一郎は、遺骨を西条に持ち帰り郷里で本葬を行い、一周忌、三周忌には東京の同宗の寺で同郷の縁故者を招いて法会を行うなど誠心誠意霊に気を配った。

○夏目漱石——漱石は、嘉一郎が松山中学在学中、明治28(1895)年に新任の教師としてやってきた。当時、同校では新任教師に難しい質問を出して返答に詰まらせ、教壇の上で立ち往生させるという風習があり、級長の嘉一郎がその役を引き受け、前夜、英語の教科書アービングの『スケッチブック』を棚橋一郎訳とウエプスターの英和辞典で訳して授業に臨んだ。漱石先生が例によって悠々と英訳を進められていたが、途中で嘉一郎が質問に立ち、先生の訳が棚橋一郎の訳やウエプスター辞典での訳と相違していることを指摘したところ先生は、「ああ、そうか、それは一つは辞書の誤植であろうか、一つは明らかに著者の誤解だ。二つとも僕の言ったように直して置け！」¹³⁾と言ったまま、又授業を続けられた。この先生の言動には嘉一郎も度肝を抜かれ、これは大した先生だとすっかり参ってしまった。

このエピソードが嘉一郎と漱石先生との出会いであった。先生は、英語という教科を教える先生特有のハイカラな洋服ではなく、羽織袴といった和服姿で静かな落ち着いた物腰で品がよく、華族の若様といった出で立ちであったとのことである。嘉一郎は、漱石先生の英語の発音や英語に含まれる内容が豊かに表現され解釈されていくことに英語の魅力を知ることとなり、後年嘉一郎が専門の医学を研究する上でも漱石先生の細かく究極まで追求するのを惜しまないやり方は大いに感化されたと言える。嘉一郎の言の中で「私の生涯において大きな影響を受けた先生が3人いる。その一人は言うまでもなく青山胤通先生の豪放闊達である。その2は、弘田長先生の懇切周到であり、3は、夏目漱石先生の精神細緻である」¹⁴⁾と後年述べている。嘉一郎には、微に入り細に亘って、

物の究極まで突きとめずにはおかないという様な性癖があり、漱石のそのような手法と似通ったところがあり、相通ずる面で、英語への関心と語学力が高まったと言える。

○青山胤通——嘉一郎は明治37（1904）年末東京帝国医科大学を首席で卒業し、翌年1月17日付けを以て、同医科大学副手を嘱託され、直ちに附属病院青山内科勤務を命じられた。彼は上京して10年念願の医者としての卵として出発した。時に29歳、当時、日露戦争真中で、彼は志願して、見習医官を命ぜられ第一連隊に入営した。超えて3月陸軍2等軍医に任じられ東京予備病院附に命じられ、日露戦争が9月に終了したが、明治39（1906）年2月から東京第一衛成病院に補され、帰還将兵の負傷等の治療や判定に従事するなど、重い任務を課せられ的確に対応した。

同年4月20日附を以て再び附属病院青山内科に副手として勤務を命じられた。

同医科大学の大御所青山胤通博士の指導の下に、1年間臨床医学の実際の練習をしていたが、翌40年3月末医科大学の助手に任じられ、9級俸を給与された。しかし、更に研鑽に励むために翌41（1908）年大学院に進むことを決意し、それに進んだ。助手から副手になった。

こうして、青山先生の指導の下、多大の愛顧信頼を博することとなり、医者として大きく成長していった。

青山胤通博士は、安政6（1859）年5月5日江戸で苗木藩士青山景通の3男として生まれ、明治15（1882）年東京大学医学部を卒業後、同大学病理学教室助手として就任し、ベルリン大学留学等を経て、東京帝国大学医科大学校内科第一講座（青山内科として君臨）教授と成り、その後同医科大学校長、同伝染病研究所（現東京大学医科学研究所）所長等を歴任した。また、明治大帝の侍医として宮内庁御用掛を務めた。明治34（1901）年には癌研究所を設立して会頭をした。

青山教授の嘉一郎助手に対する信頼は極めて高く、青山教授の講義を受けた

ものは誰の目にも頷けた。青山教授の臨床講義がある時は、毎日助手として講堂の黒板の傍に腰掛け、講義中率先して先生の補助作業を行い、聴講している学生たちが「あれが有名な真鍋さんか」¹⁵⁾と語り合い、俊英な先輩として嘉一郎を見詰めていたという。

3. 嘉一郎の教育活動での職務と教育指導状況

(1) 教育活動での職務内容

○嘉一郎が教育者として最初に職務に携わったのは、大正5(1916)年2月の青山内科附属物理療法研究所の主任(講師)としてであった。職務内容は、新入医局員の臨床上の初歩的技術を指導することと医学生に診断学の講義をすることであった。大正7(1918)年には、この研究所は青山内科の附属から独立し医科大学病院の直属となり、経費は同病院の中央部から支出され、構成メンバーも主任(講師格付)、助手1名、専属副手数名、専属看護婦長心得1名、看護婦数名、小使3名、その他志願術手数名、有給術手2名からなっていた。この研究所は、入院病棟を最初は設けていなかったが渡辺博士の斡旋と日立鉦山経営者久原房之助の大学への寄付納入により入院病棟が建てられ、物理療法の本格的治療が可能となった。この施設の完成で臨床家としての嘉一郎の研究は充実し、門下生に幾多の英才を集め、嘉一郎のきめの細かい指導によって高い技術を身に付けていき、我が国の医学界での物理的治療の基礎が築かれていくこととなり、嘉一郎は、その開祖として大きな足跡を残すこととなった。まさしく嘉一郎にとって有意義な期間であったといえる。

○その後(大正10・1921年～大正13・1924年)、物理療法研究は、治療室が拡張され、設備の完成をみた。レントゲン係及び治療術手として雇員2名が増加された。これらの所内の設備拡張や人員の増加などは、当研究所の存在の必要性を認められた証であり、大正15(1926)年初めて人件費1万円の国庫支出を受けた。それまでは医科大学病院中央部の方から補填されてきただけに画期的出来事であったといえる。

○大正15(1926)年7月には、勅令を以て『内科物理療法学講座』が成立し、臨時費15万円の国庫支出を受けることとなった。これにより、病室の増設と設備の充実整備が図られた。そして、人事構成の面においても、教授1名、助教授1名、助手4名の定員が制定され、傭員、雇員の定員は従来と大差ない、看護婦長心得が看護婦長に昇進した。この講座の成立によって、同年8月27日附東京帝国大学教授と成り、2等に叙せられた。時に年齢49歳であった。

嘉一郎の教授としての任務は、物療研究所時代の命の外、新たに臨床講座が開講され、ここに、一講座の体制が成立した。

嘉一郎の2等に叙せられるにあたって、鈴置文部政務次官の推挽の力に負うところ大で、次官の死を悼む弔辞の中で、嘉一郎は「余の不遇を憐み、余の妻をして一度観桜御宴に列せしめんがために、一躍余を勅任に推薦された」¹⁶⁾と述べている。この事について『伝記』の中のこの項の著者は「高等官2等になったことは、彼の年齢と功労を考えれば決して早くはなかったが初めて官吏となって、高等官2等は技術官として出色であった」¹⁷⁾とのべている。嘉一郎にとって『苦節十年』¹⁸⁾ 辛苦と情熱を傾けた自らの人生への思いはいかばかりか、さぞ胸中歓喜に浸った事であろうと推察されるところである。

○嘉一郎の講師から教授への職務歴について叙述したところであるが講師の職に在った期間が十年という歳月が流れており、この期間が『苦節十年』と叙述されているように困難な課題に次々と取り組み息つく暇もない忙しさに追われた日々であったと推察される。職歴から推察してかなり講師の期間が長かったと考えられるが、嘉一郎にとっては物理療法の我国における医学界での内科の治療法としての確固たる近代医学としての普及に大きな業績を挙げていった時期であり、また、臨床医学への信頼を築いた時期でもあるという点で極めて大きなエポックをなしていると言える。

(2) 教育活動としての教育指導状況

嘉一郎の教育指導状況について『伝記』に記載されている内容について挙げ

る。

○医局員への教育指導として、水治療法を施す際、自らホースを握り湿布を掴んで一つ一つ自分でやって見せて説明している。このように丁寧に手に手を取ってきめ細かな配慮をしながら指導をしていった。そのため医局員が嘉一郎の意に反する所作の時は厳しい叱責、怒号が浴びせられ、廊下まで聞こえてくることがあったほどであるが、医局員はそれをじっと聞いていた。それは、そこに部下への思いが読み取れたからである。

○嘉一郎の最初の指導を受けたのは、専属副手としてやってきた新入医局員の荒井実と内田平次郎であった。彼らに対して新知識を教え、試験管やピペットの洗い方から試薬の製法まで手を執って教え、それに応えて兩人とも知識欲と研究心を燃やした。

○岩倉信珍は、大正5年4月から入所し、臨床の第一歩から嘉一郎の指導を受けた。嘉一郎は、物理療法の指導姿勢として最も重視したことは、好い加減で間に合わせにするような振る舞いは許さなかった。診断と正確さを重んじ、学理と実際との合致することを指導する上で極めて大切にしていた。

○医局員が治療法の手続きを怠った際には「それでも、物療の医者といわれるか！」¹⁹⁾との厳しい叱責の聲が飛んだ。この言葉は、嘉一郎の師ミューラ先生の「Sind Sie doch doctor！」²⁰⁾の叱責の言葉であり、師の学生への指導で自ら聴診や打診まで手に手を取って教えられた姿勢に感銘を受けたことからこの言葉が嘉一郎の口から飛んだものである。

○医局員への指導で、質問を投げかけ、曖昧な返事が返ってくるとそれを補いながら詳細な薬理作用の説明をきちんとするといったことが常であった。また、短い期間の指導を受けた際でも毎日遅くまで付きっきりで鍛えられ技量を磨き高められていった。

○嘉一郎は、物療を主催するとともに、1週に2日間は伝研附属医院にも通って繁忙を極めていたが毎夕内科講座において、一般青年学徒のために『レントゲン学講義』を始めた。この連講は日本医学界でも画期的で、それを聴こうと

して各医局その他の聴講者は広い講堂にも溢れ、未曾有の盛観であった。この講義の中で電気学、器械の分野にも広げて、この講座を進めたことで医者にも好く知られていないレントゲンの知識の深さを普及せしめることになったことは大きな功績であった。また、彼の博識を披露する場ともなったと言える。

○嘉一郎の熱意ある指導、診療で、当時の医局員や患者にとって少し閉口したことは、彼の時間超越的行為であった。その時間を気にしない指導は、青山内科助手時代から知られており、「真鍋の外来」²¹⁾として医科名物の一つであった。

○彼の話には相手が教授連や先輩であれ、また、部下の医局員であれ、毒舌が口を衝いて出ることがしばしばあり、ずばりその意図の核心を衝いており、直言として腹藏なく口にしており、聴いている部下の者は有益なこととして耳を傾けたが、上司や先輩の者には、煙たい存在であった。しかし、学内で温厚で、公平な大人として信望のある田代義徳先生は、「真鍋こそ本当の医者だ」²²⁾と言っていたとのことである。

○また、医局員の有志を集めて、抄読会を作り、医局員の語学の進歩を図るとともに、少しでも多くの書を親しまそうとする老婆心が働いている。

(3) 教育活動での教育的信念

嘉一郎の持っている教育的信念とは如何なるものなのか。『伝記』に嘉一郎と関わった諸氏の追憶が集録されているのでそれを叙述することとする。

○嘉一郎は、まわりの者がどのような受け止め方をしようと、一向に意に介せず、ずばりその意図の核心をつき、自分の信念を真正直なまでに押通す強い決意にみなぎっていた。

○彼の医局員に対する教育指導は“本間者の医者”²³⁾，“医者らしい医者”を作ることが自分の教育者としての使命であると肝に銘じ、命を賭して、猛鍛練を持って取り組んだ。それは、若い医局員にもひしひしと感じとられた。叱られても怒鳴られても師の教えによって医局員は、「物療の将来は繋がって吾等が

双肩にあり」²⁴⁾と感じ、他の子弟関係には見られない一種の人情相寄る魂の信頼感が深まっていき、『伝記』の著者は、“真鍋宗”²⁵⁾と言った一種のナショナルリズムの言葉で著している。このように魂が込められた悲壮なまでの教育的指導は、『苦節十年』と言っている講師時代に見られ、強い教育的信念となって嘉一郎の心に深く根付いていたと言える。

○後年、物療内科創立25周年会の席上、当年の弟子に向かって「僕の今日にあるのは、一に故青山先生の庇護と私たちに前途に光明を認めなかった時代に教室で働いてくれた人々のお陰である。それを思えば感謝の涙潜然たるものがある」²⁶⁾と述べている。この言葉は、彼の心から出た言葉であり、彼の信念の強さに基づく教育指導の賜であり、全力を挙げた日々の結果を表す証で、当時の若い意気盛んな活気にみなぎっていた医局員の姿でもある。そして、彼らが後に堂々たる立派な臨床家として、我が国の医学界を背負う“本間者の医者”となって働いているのである。

○嘉一郎が弟子に常に言って聞かせた言葉に「医学の最後の目的は治療である」²⁷⁾と述べていた。この言葉を教育者としての信念と捉え、自ら臨床家として、率先躬行して、その範を示した。

○嘉一郎は、実直で礼儀正しく、夏の暑い日でもネクタイやカラーを身に付けて診療に当たり「医者が病人を診察する時には武士が戦場へ出て一騎打ちする時の礼儀と真剣味とがなくてはならない」²⁸⁾と言っていた。彼のこの考えは、彼が武士の出として儒学的教育を受けたことにも繋がるものがある。古来『医は仁術なり』の言葉が示すように気骨のある医者としての心得としてこの諺が、彼の心の中に深く刻まれ、一つの強い信念となって臨床に取り組む部下への愛情溢れる態度や言葉として投げかけられたものと言える。

4. 嘉一郎の研究活動としての業績

(1) 学術研究上の業績

○大正5（1916）年、日本内科学会総会で、『レントゲン線及びラジウムの

内科的実地応用』と題して報告講演を行い、我が国のレントゲン学発達の基礎を築いた。

○大正8（1919）年日本医学会総会で、『鉱泉及び気候療法における2、3の理学的要素の意義』と題して特別講演を行い、温泉ばかりでなく、気候療法が医学上極めて重要であることをこの時既に明らかにしている。

○大正7（1918）年ごろから潜函病の研究に興味を持ち、他の研究者を含めこの研究に従事し、潜函病に関する幾多の新知見を得て、学界に大いに貢献していった。

○臨床に関する報告や研究は、嘉一郎が一生を通じて臨床医家の独立を目指してただけに、その事例は枚挙にいとまがないほどである。それらは実践、応用に直ちに有益なものとして大きな効果をもたらしていくものである。

5. 嘉一郎の実践活動（学外活動）の業績

嘉一郎の実践活動として、学外活動にあつては、我が国の理学療法の全国への普及に当たるといふことであつた。そして、学内活動にあつては、物理療法研究所の病棟での診察、病室回診などに力を注ぎ、「医学の最後の目的は治療である」²⁹⁾と述べたように臨床医学に心血を傾けた。

(1) 実践活動（学外活動）

ア 東京鉄道病院に理学的治療科の新設

○鉄道関係の従業員には、外傷後胎症患者が多く出る。その治療に物理的療法の効果が期待できると判断した鉄道省は、大正9（1920）年3月、保健課の医員の橋口正樹を嘉一郎の物療研究所へ派遣し、物療について教えを請わせた。当時、物療については、嘉一郎の物療研究所以外は、神戸の県立病院ぐらいであった。

国鉄の方からこの療法を取り入れようとする機会を捉えた嘉一郎は、この治療が、水、温泉、空気、光線、環境等幅広い自然の恩恵の条件で効果をもたら

すという広汎な領域を占めていることから、鉄道が全国を網羅していることに着目して、東京鉄道病院にその理学的治療科が新設されるよう鉄道省に積極的に働きかけた。その結果、この病院に物理的療法、レントゲン診断及び治療法が取り入れられた。嘉一郎が全国への普及を期待したように、これを皮切りに大阪、仙台、札幌、門司、名古屋の各鉄道病院にもそれらが導入され、嘉一郎の物理療法研究所の医局出身者がそれらの担当者として就任していった。

イ 温泉療養所の設置

○鉄道省では、嘉一郎の提議により、外傷性後胎症の後療法として、伊東、有馬、飯坂、登別、亀川等の各温泉場に温泉療養所を開設することとなり、出張して、自らその地域の環境条件、湧出量、性分、温度、適応症等の正確な調査を行い、それに合った物理療養の施設、設備を用意させ、その各療養所の主任には彼の物療医局員を配置した。

ウ 潜函病予防法施行への取り組み

潜函病予防法の施行にも取り組んだ。手がけたのは、隅田川、揖斐川、筑後川等で鉄橋架設に当たっては、その橋梁の基礎工事は全て潜函作業で完成させた。水量の多い工事であった丹那隧道での排水側道掘削も潜函作業で当たった。

これらの作業に伴っておこる潜函病に発病者の絶無を掲げて物療出身の医者を派遣して治療に当たった。そのため、その効果は極めて良好な成果をもたらした。

このことから、東京市の衛生設備には物療医局出身者が多く進出することとなった。

また、関東大震災後、東京市の復興事業として永代橋及び清洲橋基礎工事潜函作業従業員員の保健に関する事務、隅田川の橋梁工事員の保健衛生に関する事務等を囑託され、よく任務を果たした。

(2) 実践活動（学内活動）

嘉一郎は、物理療法研究所での医局員への教育指導だけでなく、同所の理学療法の高い技術と嘉一郎の名声を聞き、全国の患者が診療を求めてやってきたことに、全力を挙げて応えようとした。そして、多くの各界の名士とも主治医として深い繋がりを結んでいき、それらの方々への献身的な治療に当たった。

6. 嘉一郎の教育者としての人物像（魅力）に関する考察

嘉一郎の教育者としての人物像（魅力）を人柄（性格）、思い（人間性）、教育活動として教育内容、教育指導、教育的信念、そして研究活動として学術研究、実践活動等について、前述した『伝記－真鍋嘉一郎』に記載されている内容から叙述してきたところである。これらについて、私が“追い求めてきた大学教師のあるべき姿は如何なるや”という視点から考察をしていきたい。

(1) 教育者としての人柄（性格）

嘉一郎の人柄（性格）は、情熱と熱意を持ち、正義心に篤く、並はずれた努力家で絶えず自己に鞭打って止まない気性があり、純粋で公明正大な姿勢は、嘉一郎と接した人たちから異口同音に語られている言であり、絶大なる信頼を受けていると言える。これらは、小学校、中学校、高等学校及び大学を問わず教師として最も求められている人間的資質ではないかと考えており、嘉一郎はそれらを具えているものと確信している。翻って寄って来るこのような人柄（性格）の所以は、幼少のころからの生育歴に負うところ大であると考える。

6歳の時、父と死別し、生活の要を失った嘉一郎一家にとって、母からのひたむきに子どものために全てを捧げる献身的な愛情に支えられて育った事への思いや一家を支えなければならないという悲痛とも思える使命感が生まれ、艱難辛苦の境遇の中から強い意志力と怯まない強靱な忍耐力と努力感が培われてきたと思われる。

(2) 教育者としての職務と教育指導（教育方法）

○嘉一郎の教育者としての職務は、大学卒業後青山内科附属物理療法研究所の主任（講師）として新入医局員の臨床上の初歩的技術を指導することと医学生に診断学の講義をすることであったがこれらの仕事への熱意と誠意ある取組み姿勢は、医局員から厚い信頼を寄せられていた。

嘉一郎の取り組んだ物理療法は、我が国では初歩的段階で欧州とは遥かに立ち遅れ、研究設備も不十分であったが嘉一郎の熱意と研究の深まりと時間的経過『苦節十年』の中で着々と進められ『内科物理療法』という確固たる領域を築き、教授として、臨床医学界に物理療法の重要性をしっかりと位置付けたのであり、物理療法の先駆的役割を果たしたと言える。

○嘉一郎の教育指導(教育方法)の1つは、初心者に対して、自らやって見せ、そして誠意を以て丁寧な手に手を取って教えていることである。譬に『やって見せ、させて見せて褒めてやらねば人は動かじ』という言葉があるように誠意を以て教育指導を行うことは、幼児を教えるにしろ学生を教えるにしろ教育指導の基本として大切なことである。2つは、教育指導に純粋ともいえるひたむきな情熱(熱意)を傾けたことである。講義や実習を聞こう或は受けようとする医局員や一般の学生などに対して、精魂を込めて指導に打ち込む姿勢は、大学教育の中ではなかなかできることではない。今日の学生の講義聴講の態度や教師の講義を行う姿勢を考えると、嘉一郎のこの純粋な情熱ある教育指導の姿勢には、我々に多くの警鐘をならしており、頭を垂れ大いに考えさせられることである。3つは、教育内容を理解しないままにいい加減な態度をとったり、曖昧な姿勢に対しては、毅然とした態度や叱責をするが、その後子弟に対して、懇切丁寧な手に手を取って理解をするまで時間を割いて教えていることは、教師として厳しさと思いやりの心を持つことが大切であることを示唆している。4つは、医局員への教育指導や外来人への診察で時間を度外視した行為について、当時の医局員や患者にとって少し閉口していたようであるが、私たちの大学での講義や演習の時間についても同様のことが言える。話しの内容や

論議が佳境になった時、お互いの人間関係や時間に配慮をしながら、それを終えることの難しさもあり、嘉一郎の時間超越行為もあながち否定されるべきものではないのではないかと考える。要は、指導を受ける側との間に、いかに信頼関係を構築しているかということが重視されるべきものであると考える。

以上、嘉一郎の教育指導の状況について叙述してきたところであるが、教える大学教師と教わる学生との信頼関係の重要性は最も大切なことであり、嘉一郎と学生との間に結ばれた深い信頼関係について大いに学ぶべきところである。

(3) 教育者としての信念

嘉一郎は、“本問者の医者”を創るということを教育指導の柱に据え、この強い信念の下で命（いのち）を賭して医局員を鍛えていっているということに強い感銘を受ける。この意気ごみは、厳しさと叱咤激励という形で子弟に投げかけられたのに対して、医局員たちも「物療の将来は繋がって吾等が双肩にあり」と感じ、他の子弟関係には見られない一種の人情相寄る魂の結びつきの強い信頼感で、一種のナショナリズムとも言うべき“真鍋宗”なるものが育っていったことは、医局員等に、嘉一郎の強烈な教師像を深く焼きつけ、多くの感銘を与えたものであることを物語るものである。

私の半世紀に及ぶ教師歴の中で、このような感銘を受け、多くの生徒たちから慕われた教師は何名かいる。その中の一人に佐藤哲哉という先生がおられる。この先生は、私の新任の高校で、歴史（日本史）を担当し、授業での指導は熱意あり、迫力あり、興味関心や生徒の発言を引き出し、授業内容にも精通し、授業中の生徒の目はきらきら光り輝き、意欲的であった。何回か授業参観をさせてもらって、いつも強い感銘を受けた。この先生の授業の凄さは、当時、実施された第12回全国社会科教育研究大会（松山市）³⁰⁾での参観授業を文部省社会科教科調査官であった平田嘉三（後広島大学教授）氏が参観され、授業参観の講評で極めて高い讃辞を送られたと聞いている。また、教え子の同期会

などでも度々この先生のことが話題となり多くの感銘を受けたことが語られている。

嘉一郎に対する“真鍋宗”ともいう一種のナショナリズム的また、信仰心に近い固い強い絆が生まれていることに大学教師としてのあるべき姿を垣間見た気がした。

(4) 研究活動としての業績

大学での研究活動は、高等専門機関として社会や生活と密接に関わり、21世紀での知識基盤社会のリーダーとしての使命を担っており、また、教育活動の実践の場としての役割と使命も担っている。

嘉一郎の研究活動は、学術研究として学会発表、研究誌への論文掲載、放送、出版界の方々との接触等を通して、学界や名士等からの高い評価を受けていたことが『伝記』に示されていた。しかし、教育者としての真骨頂が鮮明に表されているのは、学外での実践活動である。その場は、1つは、大学病院等での臨床の診療活動であり、もう1つは、我が国の理学療法を全国へ普及させたことにある。

嘉一郎の臨床技術を信頼して多くの患者が門を叩き、その期待に添った効果を得ていることや水、温泉、空気、光線等幅広い自然の恩恵的条件を物理的療法として利用し、その効果を科学的に明らかにし、全国の国鉄病院へ普及させ、全国の温泉場に温泉療養所の開設に支援をした。また、潜函病に対してもこの物理療法を取り入れて成果を挙げている。これらの実践活動での社会的貢献は目を見はるものがあり、大学教師として望ましい活動である。

7. お わ り に

嘉一郎の教育者としての人物像（魅力）について教師としての視点から考察してきたところである。現代社会にあって、社会との関わりの中で、高等専門機関としての大学に求められる役割と使命は、また、求められる大学教師像は、

「教育」, 「研究」, 「実践」の3つの柱をバランスよく果たすことが重視されるべきではなかろうかと考える。勿論, バランスよくといってもどれも均等に達成するということは至難の業である。その点, どれかに重点を置く活動を取る方が大きな成果が期待できると言えるし, そうなることが当然かもしれない。ただ, 今日まで我が国の大学教員の多くに, 教育活動より研究活動を重視し, かつ高い評価をし, 教育活動に力を注いでいる教師はややもすると軽視されがちな状況にあることに大学の社会的貢献度という点から言うと一面的であるのではないかと考える。この点, 今日では, 文部科学省においても, 大学教育改革の中で, 研究と同様に教育の重要性についてもしっかりと位置付けているところである。

翻って, 嘉一郎の教師としての人物像(魅力)を考えてみると, 「教育」, 「研究」, 「実践」の3つの柱のどれをとっても前述したように優れた業績を残していたと言える。その中でも, 教育活動面において, 教師として求められる学生への教育的愛情, “本問者”を求めて止まない純心で熱い教育的指導と信念, 教職専門知識などに, 特に目を見はるものがある。今日の大学教育に改めて見直すべき教育の視点と捉えたい。明治, 大正, 昭和の3代にわたる目まぐるしく変貌していった我が国の社会において, 医者として, 並びに大学の教師として, 大きな功績を残していった嘉一郎の教師としての人間像(魅力)に大いに魅せられていったところである。限られた資料と拙い叙述で嘉一郎の教育者としての人間像(魅力)を十分引き出せたか大いに危惧するところである。さらなるご意見を頂ければ幸いである。

注

- 1) 『大学の社会的役割と使命』(Satoru HARANO, MD, PHD, MPH 10/June/2002, P1)の中からその主旨
- 2) 『私の大学教育改革論』～相互評価による教員評価と任期制・年俸制の導入が不可欠～(岡部陽二のホームページ, 医療経済研究機構専務理事) P1
- 3) 『大学教員の資質と役目』(Satoru HARANO, MD, PHD, MPH 9/July/2002, P1)の中から

その主旨を叙述

- 4) 『松山中学・松山東高創立120周年記念写真集—120年の鼓動—』(愛媛県立松山東高等学校・松山中学松山東高同窓会) 1998年 P26
- 5) 『伝記・真鍋嘉一郎』(「伝記叢書312」真鍋先生伝記編集会 東京都文京区東大医学部物療内科 三澤敬義 発行所 日本温泉気候学会 小野印刷 1950年又は大空社 1998年)
- 6) 上記著書 P178
- 7), 8) 上記著書 第1章 家系と生立 7 三楽先生と嘉一郎の小学校時代の P23
- 9) 上記著書同上 8 遊び仲間の P33
- 10), 11) 上記著書 第2章 中学校生活 1 松山中学校時代の P39
- 12) 上記著書同上 P36
- 13) 上記著書同上 2 松山時代の教師と生徒の P58
- 14) 上記著書同上 P60
- 15) 上記著書 第4章 青山内科時代 3 青山内科の副手助手時代の P110
- 16), 17) 上記著書 第5章 学者としての嘉一郎 10 苦節十年間の業績の P185
- 18) 上記著書同上 P178
- 19) 上記著書同上 1 物理療法研究所の創立の P143
- 20) 上記著書同上 P144
- 21) 上記著書同上 P145
- 22) 上記著書同上 2 嘉一郎と伝染病研究所 P146
- 23) 上記著書同上 5 門下生の指導と所謂真鍋宗の成立の P159
- 24) 上記著書同上 P160
- 25) 上記著書同上 P159~160
- 26), 27) 上記著書同上 P160
- 28) 上記著書同上 P161
- 29) 上記著書同上 P160
- 30) 第12回全国社会科教育研究大会(愛媛県松山市), 会場:愛媛県松山市立道後中学校, この大会は, 「社会科の学力向上をめざす学習の近代化はいかにあるべきか」を大会主題とし, 小・中・高校各主題(高校—学年指定にともなう各科目の関連とその発展的取扱はどうすればよいか)の下に3日間に渡って研究授業, 講演, 指導授業, 分科会, パネル討議, フィールドワーク等が行われ, 全国の社会科担当教員, 研究者, 教育行政の関係者など多数が参加し, 講師として, 文部省教科調査官 平田嘉三氏(後広島大学教授), 松井武敏名古屋大学教授, 井上智勇京都大学教授等の出席があり, その講演や講評などがあった。この大会中, 高校の研究授業の焦点授業として, 日本史では, 松山東高校 佐藤哲哉教諭が「鎖国」をテーマとして焦点授業を行った。この焦点授業を参観された文部省の平田嘉三教科調査官が講評で高い賛辞を贈られたとの声を多くの参加者から聞いた。